

白氏文集 三十二 長恨歌 (二)

加藤 淳平

唐の玄宗、名は李隆基、唐の第六代皇帝なり。若くして則天武后に囑望せられ、二十七歳にして即位、四十数年の治世の初めの三十年近くは政務に精勵恪勤し、名君と謳はれ、盛唐と稱賛せられたる榮華の世を實現せるも、漸く政務に倦み、五十代後半にして得たる若き楊貴妃に迷ひ、政務を放擲す。寵愛せる安祿山の亂に逢ひ、長安より四川に避難し、楊貴妃を殺して帝位を退くの己む無きに至れり。是より唐朝の衰退始まる。

長恨歌 (二)

長恨歌 (二)

承歡侍宴無閑暇

歡びを承け宴に侍して 閑暇無し

春從春遊夜專夜

春は春遊に従ひ 夜は夜を専らにす

後宮佳麗三千人

後宮の佳麗 三千人

三千寵愛在一身

三千の寵愛 一身に在り

金屋粧成嬌侍夜

金屋に粧成りて 嬌として夜に侍り

玉樓宴罷醉和春

玉樓に宴罷みて 酔ひて春に和す

姊妹弟兄皆列土

姊妹弟兄 皆土に列なり

可憐光彩生門戶

憐れむ可し 光彩門戸に生ず

遂令天下父母心

遂に 天下の父母の心をして

不重生男重生女

男を生むを重んぜず 女を生むを重んぜしむ

驪宮高處入青雲

驪宮高き處 青雲に入り

仙樂風飄處處聞

仙樂風に飄りて 處處に聞こゆ

緩歌慢舞凝絲竹

緩歌と慢舞 絲竹を凝らし

盡日君王看不足

盡日君王 看れども足らず

漁陽鼙鼓動地來

漁陽の鼙鼓 地を動して來たり

驚破霓裳羽衣曲

驚破す 霓裳羽衣の曲

(大意) (楊貴妃は玄宗の感情や氣分に合はせるのがとりわけ上手な女性だったから) 君王の歡びを自らの歡びとし、宴會には缺かさず侍つて閑暇を惜しまず、春は君王の春の遊びに従ひ、夜は夜で常に務めを獨占する。後宮には佳人麗人が三千人居るけれども、この三千人に對する君王の寵愛は、楊貴妃一人に集まつた。貴妃の御殿での化粧を終へてあでやかに君王への夜の務めを果たし、華麗な樓閣での宴會が終ると貴妃は酔ひ心地で君王の春の氣分に合はせる。斯くして貴妃の姊も妹も弟も兄もそれぞれに領地を賜り、楊一家の門が光り輝いて見えたのは素晴らしいことである。到頭世間の父母の心に、男の子を生むより女の子を生むのを重んじさせることになった。玄宗は楊貴妃のために驪山の高いところ雲に聳える宮殿を建てさせた。朝廷の妙なる音樂が風に乗つてあちこちに聞こえ、静かな音樂とゆつくりした舞は絲や竹の樂器が一瞬凝固したやうだ。音樂好きの玄宗はひねもす演奏を聴き演舞

を見て飽きない。(しかしそんな歡樂も長くは續かず) 漁陽の地から戦ひの鼓が地を動どよもして襲來し、玄宗皇帝作曲の「虹の羽衣の曲」の演奏を驚かし、壓倒する。

(平成三十年七月五日受附)